

ドイツアート Bar Creators@Kamogawa

Creators@Kamogawa は、日本とドイツのクリエイターが、Bar のようなくつろいだ雰囲気です。今回のテーマは、『フクシマや難民を前に、芸術に何ができるか』。

今日、世界で起きている大きな危機は、芸術の世界にも影響を及ぼしています。フクシマの事故やヨーロッパの難民問題のような出来事が実際どのように作品に反映されるかは、アーティストのスタンスによって異なりますが、強いメッセージ性を持ち社会に直接的に影響を与えようとする作品もあれば、このような問題を“借景”として利用した作品もあります。また逆に、時事問題とはあえて一線を画して、我が道を行こうとする芸術家もいます。

2016年1月中旬～4月中旬までヴィラ鴨川に滞在するドイツ人芸術家4人が、建築史家・建築批評家として震災と建築のあり方に向き合う五十嵐太郎氏と、大胆な手法で社会的テーマや震災に取り組んできたアーティスト集団『Chim↑Pom』の卯城竜太氏をゲストに迎え、大きな社会問題に直面したとき芸術に何ができるのか、その可能性や必要性について議論します。

座談会の後は、館内のドイツカフェ『カフェ・ミュラー』にて、ドイツビールやおつまみを片手に交流をお楽しみください。交流会では、滞在中のドイツ人芸術家の作品も、モニターでご覧いただけます。



ハネス・マイヤー Hannes Mayer (建築家)

1981年生まれ。コト布斯、ロンドン等で建築を学び、専門誌での発表や著書多数。現在、ウィーン造形美術アカデミー教授。キュレーター、地衣類研究者、音楽家の顔も持つ。2007年以降フランク・ロイド・ライトの空間概念の今日化に取り組む。これまでの作品はチューリヒ建築フォーラムや第12回ヴェネチア・ビエンナーレ建築展等で紹介された。京都滞在中は、デジタルプロセスをベースとした技術的・理論的な仕事と日本の竹編み細工を関連付け作品化する予定。



五十嵐 太郎 Taro Igarashi (建築史家、建築批評家)

1967年生まれ。建築史・建築批評家。1992年、東京大学大学院修士課程修了。博士(工学)。現在、東北大学教授。あいちトリエンナーレ2013芸術監督、第11回ヴェネチア・ビエンナーレ建築展日本館コミッションを務める。第64回芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。『現代日本建築家列伝』(河出書房新社)、『被災地を歩きながら考えたこと』(みすず書房)、『忘却しない建築』(春秋社)、『3.11/After』(監修、LIXIL出版)ほか著書多数。



ティモ・ヘルプスト Timo Herbst (美術家)

1982年生まれ。ライブツィヒ、プレーメン等で美術を学んだ。身体運動のコレオグラフィーと空間性を、ビデオやスケッチ等を通して考察する。作品は、ミュンヘンのハウス・デア・クンストやライブツィヒ造形美術館をはじめドイツ国内外の数々の展覧会で紹介された。京都滞在中は、日本の都市空間における運動リズムや活動を調査し、身体表現に翻訳してフィルムや大判和紙上に視覚化した作品を創る予定。公式サイト www.timoherbst.org



卯城 竜太 Ryuta Ushiro (アーティスト集団『Chim↑Pom』)

2005年に結成された6人組アート集団『Chim↑Pom』のリーダー。現代社会に全力で介入した作品を発表。東京を拠点に世界中でプロジェクトを展開、キュレーションも行う。福島第一原発事故の帰還困難区域内で2015年3月11日より開催中の“観に行くことができない”国際展『Don't Follow the Wind』をたちあげ作家としても参加。近著に『芸術実行犯』(朝日出版社)、『Don't Follow the Wind』(河出書房新社)など。公式サイト <http://chimpom.jp/>



アンドレアス・シュルツェ Andreas Schulze (美術家)

1965年生まれ。ライブツィヒで美術を学んだ後、メディア社会に過剰に溢れる画像や情報、秩序の構造、プレゼン方法等をテーマに創作を行う。作品はヨーロッパとアメリカの主要な展覧会で紹介されている。京都滞在中は、京都の文化遺産がいかに表現・認知されているかを調査し、デジタル技術のもたらした変化の中で、大衆観光と神社仏閣の神聖さ、自撮り遊びと宗教的敬虔さは共存しうるのか等を考察して、画像とテキストからなるコラージュを創作予定。



小崎 哲哉 Tetsuya Ozaki (司会、構成)

1955年東京生まれ。ウェブマガジン『REALTOKYO』、『REALKYOTO』発行人兼編集長。CD-ROMブック『デジタル歌舞伎エンサイクロペディア』、写真集『百年の愚行』などを企画編集し、現代アート雑誌『ART IT』を創刊した。京都造形芸術大学大学院学術研究センター客員研究員、同大学院、愛知県立芸術大学講師。あいちトリエンナーレ2013のパフォーミングアーツ統括プロデューサーを担当した。2014年冬、『続・百年の愚行』を刊行。



パウラ・ロソレン Paula Rosolen (振付家、ダンサー)

1983年生まれ。ダンス、ドキュメンタリー演劇、オーラルヒストリーの関係性をテーマに創作。エッセンのパクト・ツォルフェライン、ハンブルクのカンパナーゲルをはじめ、ポーランド、アルゼンチンなど各地の重要な劇場やフェスティバルで作品を上演。2014年パリの国際コンクール「ダンス・エラジー」で優勝。京都滞在中は、文楽人形のなめらかな動きや感情表現、その演技的知識を研究して、自身の新作に役立てる予定。公式サイト www.paularosolen.com

交通のご案内

京阪電車 出町柳駅より 南へ徒歩8分
京阪電車 神宮丸太町駅より 北へ徒歩6分



主催・お問い合わせ

Goethe-Institut Villa Kamogawa
京都市左京区吉田河原町 19-3
(川端通り荒神橋上る)
TEL: 075-761-2188 (内線 31#)
info@villa-kamogawa.goethe.org
www.goethe.de/villa-kamogawa

